

低きに降る神、その喜び

2009年に聖地旅行に行かせて頂いた時、最後の日に訪れたのが、今日の聖書箇所に出てくるエリザベトが住んでいたという小さな山里でした。「そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。そしてザカリアの家に入ってエリザベトに挨拶した」と記されていますように、そこはイスラエルには珍しく緑の木の多い山里で、祭司たちがまとまって暮らしていた居住区だったようです。現在はそこにマリアとエリザベトの出会いを記念する訪問教会と少し離れたところに聖ヨハネ誕生教会が建てられています。ユダヤでは洗礼者ヨハネの誕生の地として知られるエンカレムという山里です。エルサレムから西へ5キロほど降った場所で半田と阿久比くらいの距離でしょうか。エルサレムの騒がしさ、賑やかさが嘘のような静かな里でした。マリアは親類であるエリザベトを訪ねてここで三ヶ月ほどを過ごしたとあります。突然の天使ガブリエルの訪問、そして受胎告知、驚きの連続だったでしょうが、重い使命を託されたマリアに与えられた天の配慮が、不妊の女と呼ばれていた叔母エリザベトが身籠っているというしるしでした。神に出来ないことはない、そのことがマリアの心の支えとして贈られました。そこで彼女は急いで山里の叔母エリザベトを訪ねたのです。この訪問を描き出すルカの筆は本当に冴えていて、今回あらためて読み直して、神の御業に用いられているふたりの女性に備えられた神の恵みを喜びあう姿に慰めを与えられました。マリアと出会ったエリザベトのお腹の中で胎児が踊ったと言います。そしてエリザベトは聖霊に満たされて声高らかにマリアを言祝ぎます。この箇所、わたしは女性ふたりの二重唱を連想してしまうのですが、エリザベトがアルト

の声で「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところへ来て下さるとは、どういうわけでしょう。あなたの挨拶のお声をわたしが耳にした時、胎内の子が喜んで踊りました。主が仰ったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう」と賛美する。このアルトの Aria に、マリアが答えて歌い出す。これが有名なマグニフィカート、「マリアの賛歌」と呼ばれるものです。デュエットならば、ソプラノの Aria で歌って欲しい賛美です。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます」と歌いだされます。ふたりの、神の業を身に宿した女性たちが聖霊に満たされて賛美をする。喜びを分かち合う。美しい場面だと思います。今回、この美しさはどこから来るのかとずっと思い巡らしていたのですが、まず第一にというか、これがすべてだと思うのですが、神がすべてを備えていて下さることの有難さ、麗しさです。これがあらゆる喜びの基礎として据えられているのです。神が見そなわしてこの時、彼女たちに、とくに重い責任を身に受けたマリアのために備えて下さった出会い。親族のエリザベトをマリアの支えとした。6ヶ月目に天使ガブリエルは受胎告知をマリアに告げに来ましたが、この6ヶ月という期間はマリアがエリザベトを訪れて、神に出来ないことは何一つないという宣言にアーメンと唱和する。ああ、本当に神は不妊の女と呼ばれた叔母を顧みてくださっている。ならば天使が告げたとおりに、このわたしの身にも神の御業がなるに違いないということを感じさせていただいた。マリアの心のなかにあったであろう、あの出来事は夢ではなかっただろうかといった一抹の不安や、思い返してみればといった気持ちの揺らぎを一点の曇りなく吹き払う。身重となったエリザベトの聖霊に満たされた賛美の声

に本当に励まされる。ここに神の使命を負って歩むものへの配慮と労りを見て取ることが出来ます。またわたしたちの信仰はひとりで保たれるものではなく、同じ信仰を持つ者の声を、祈りを、賛美を必要とするという真実を教えられます。わたしたちが心弱るとき、不安や罪に陥ったとき、神はそのような形でわたしたちを励まして下さる。逃れる道を備えてくださっている。この箇所から、神の恵みのご支配を見て取る者は幸いです。エリザベトとマリアはこのことを起こして下さった神を崇めます。崇めるとは神を大きくすることです。わたしたちの目にみる現実や、そこから感じ取る不安や恐れよりも、神が聞かせてくださったこと、示してくださったことを大きくする。そうやって神への信頼を告白する。そのためにこの時、お互いがお互いを必要としていた。彼女たちは御業を分け合う喜びを賛美し、同じように神に召され、ともに働く同労者として互いに励まし合った。この分かち合う喜びが、神が示された使命を担おうとしているふたりを力づけている。神の備えを見て取ったふたりの喜びの賛美が、神なきが如きこの世にあって輝いています。この出来事の麗しさは、神が生きておられ、すべてを支配し、必要なものを備えておられることを見て取った喜びが中心なのです。このときエリザベトはマリアよりもはるかに年長ですが、声高らかに、神のお言葉に従う道に自らを賭けたマリアを褒め、祝福しました。日本語には「言祝ぐ」といういい表現がありますが、言をもって褒める、祝福する。祝福や賛美が一番美しい舌の使い方ですね。日常のなかで、呟いたり、愚痴ったり、誰かをそしたり、呪ったり、よくても説明や、弁解のために舌を使うことが殆どで、もしも日曜日の礼拝がなかったならば、わたしの舌は賛美の目的のために使われることはないのではないかと思わされました。そしてマリアはエリザベトの

賛美に押し出されて、口を開きます。マリアが賛美したい中心は、神がその民を顧みて下さったということです。たしかに主は生きておられ、その民を顧みてくださる。その証拠がこの身分の低いわたしのような者を御業が現れるための器として顧みてくださったことだ、そうマリアは神を褒め称えるのです。マリアはひとつひとつ、神が自分に示して下さった恵みを数え上げ、それを神の民イスラエルの救いの歴史のなかに接続して神を大きくしています。この感覚も大切ですね。わたしの救いはわたしたちに示された神の大きな救い、ご計画の中に位置づけられるものだという感謝の賛美は、天にまします我らの父よ、という祈りが教えられておりますように、わたしの信仰は、我らの信仰によって守られ、受け継がれているのだという信仰の真実を讃えているのです。エリザベトとマリアは世代が違うのもこの意味で意義深いですね。子を宿した女性として同じ立場に置かれていますが、エリザベトはマリアの親以上の年齢です。彼女がマリアを褒めることによって、マグニフィカートが歌い出されたわけですから、このとき、親世代の信仰がマリア自身の体験していることを神の御業として受け入れるように勧め、それが実を結んでいく。神の救いの歴史の中に、いまマリアも確かに生かされていることが彼女自身の問題として確認された瞬間です。最初に、信仰生活は1人でするものではないことが分かると言いましたが、確かにマリアの場合は、ひとりの少女の中に聖霊によって子どもを宿すという、夫ヨセフの理解がなければ最悪の事態すら覚悟せねばならない使命が担われていました。わたしたちの器は容量が決まっていて重荷が大きければ心が溢れてしまいます。だからこそ、神はマリアの傍らにエリザベトを備えられたのです。神の御業を担う少女をエリザベトは励まし、マリアもそれに応える。互いの目線は同じです。

神さまに向けられている。そしてマリアは三ヶ月ほどエリザベトのもとに滞在してから、自分の家に帰ったと記されています。訪問した時、エリザベトは妊娠6ヶ月、これに三ヶ月が加わるのですから、9ヶ月、来月には出産という時期まで共に過ごすことによって、マリア自身も受胎から三ヶ月を迎えて安定期に入ったでしょうし、何よりもこの安定というのは身体の、というよりも、心と魂を宿すトータルな人間としてのマリアの状態が、エリザベトの傍らにいて、お手伝いすることを通して、神の御業がなることを日々、知らされてゆく。そのような神への信頼を深めてゆき、自分の使命に備える時とされていたことに気付かされます。神の御業をしっかりと見届け、マリアは自分の家へ、彼女自身の持ち場へ帰り、神が彼女を通して実現しようとしておられる救いの御業に仕えるのです。神さまはかならず御業のために用いる者たちのために必要な備えをして下さる。クリスマスを迎えるこのとき、神の恵みのご支配を見て取って、慈しみ深い神の御業を、わたしたちも喜び、賛美の声をあわせます。

お祈りいたします。